

イケメンヒーローが短小だったばかりに
彼女に玉潰し去勢を食らって
寝取られセックスを見せられる話



一章 「し！ 見ちゃいけません！」 ヒーローの股間は閲覧禁止

公園。

野球をする少年たち。かなり小さい子たちで、付き添いの母親たちも三〇にならないものばかりに見えた。

と、ホームラン。

飛ぶボール。その先に一人の青年。

少し前、少年らの母親が公園について彼を見たとき、一様に息をのみ、顔を赤らめた。

イケメンである。そして一九〇ぐらいの長身。

珍しい……というより特異な緑色の髪。落ち着いた風貌だが、まだ学生。

おずおず挨拶して、ただ返事を返されただけで主婦たちは目を輝かせた。

俳優みたいだ、あんな子がいるのか、近所に住んでいるのか。

噂しつつ、離れていったものだ。

赤城白斗（ハクト）。それがイケメン長身青年の名前だった。

飛んでくるボール。

頭に当たる。一瞬前にポッと姿を消す。そして少し後ろの、公衆トイレの屋根の辺りから再び姿を見せ、子供らの方向に飛んで帰る。

よく見ていなければ、跳ね返ったように見えただろう。

いや、よく見ていた子供にも主婦にも、そう見えた。

ボールが空中で消えて、別のところから出てくるなど起こるはずがないことなのだ。

だから勝手に「起こりうる展開」が起きたのだと思ってしまう。

実際のところ、「消えて現れる」可能性より、「跳ね返るのを見間違えた」可能性のほうがはるかに高いのだからそう考えるのが当然だろう。

しかし、真実は「消えて現れた」のである。

青年が右手を光らせる。常人には光っているのは見えない。

指抜きの手袋をしているが、それも常人には見えない。

エーギルという謎のエネルギーを使う、エーギラーと呼ばれる異能者にしか見えない。

エーギラーは、基本的に身体を常人からは考えられないほど強化している、そして一つずつ他人にはない特殊能力を持っている。

白斗のそれは空間転移。

エーギルを実体化させた手袋であらかじめ触っておいた場所に、体の近くに来たものを転移させる能力。

その名も「定められた運命 ザ・ディスティニー」という。

必殺技にそんな名前を付けているなど冷静に考えれば常軌を逸しているが、エーギル使いの伝統なので白斗も別に変だとは思わない。

——いや……正直言って「厨二とか呼ばれるあれだよなあ」と思わないでもないが、周囲の敵も仲

間も全員がガンギマリで技名叫ぶ業界だからなあ……いや、中には俺みたいに思いつつ、合わせてる奴もいるんだろうけど……

妹を待っている。

同じエーギル使い。野球している少年らよりはいくつか年上だが、それでも白斗の半分の年齢。

技名「血の天秤 ブラッド・リーブラ」という、本来ならかなりの犠牲を伴う能力を使う。

分類としては呪いで、自分が受けた打撃を敵にも負わせるものだ。

本来なら重傷を負わせるには自分も重傷を負う必要があるものだろう。

だが白斗の妹、赤城有抄（アリス）はそれをかなりうまく、というかほぼ反則的に使い、ほとんど自分は傷付かずに敵を倒す場合がしばしばだ。

それを見ていると、白斗は何とも言えない気分になるのだ。

——頼りになることは確かだから、いいんだがな……強けりゃ怪我もしないし死にもしない。っていうか、あいつ戦いで怪我したことないし……

腕としてもエーギルの量としても、白斗より相当劣るのに、だ。

ちなみに白斗はよくボロボロになる。まあ強い敵に突っ込んでいくから、ともいえるが。

チラ、と時計を見る。

「遅いな……」

呟きつつ、公衆トイレを見る。

尿意。妹が来る前に済ませるか、と軽く考えて歩く。

中に入ると、当然のように小便器の前に立つ。

人がいれば絶対個室に入るが、いないなら断然小便器。エーギル使いとして常に緊張を強いられる人生であるだけに、解放感を味わえる機会は逃さない。

それでも、人がいれば個室だ。

それには理由があった。

ジッパーを下す。

ズボンの前は、必要以上に膨らんでいた。

朝に通り過ぎた主婦たちも全員が申し合わせたようにそこをチラ見して、後で噂していた。

「すごいもっこりしてたわ！」

「だよね、だよね！ やっぱり体格いい人はあっちの体格もいいんだ！」

「あの顔であの体格で、下までって……うちの旦那の反対じゃない！」

「あのもっこりに叶う人はまずいないって！ あー、一目見せてもらいたいわー！」

「だめよ！ 旦那のと比べたらかわいそうだもん！」

子供らが準備体操している横で、興奮気味でまくしたてたものだ。

その中の一人が、トイレに入る。

男子トイレにである。

「あら、ごめんなさいね」

「え？ な」

「うちの子が……ごめんなさいね。やだ、人がいるなら、女子のほうに行ったんだけど……」

すまなそうな顔をする若い主婦。野球服の子供を連れている。

——うふふ、なんてねー。あなたが入るの見てたから、こっちに来たのよ。うふふふ、いいタイミングでこの子も「おしっこ」なんて言ってくれたもんだわ。みんなに後で報告しようっと。さあ、早く近づいて特等席に……と。

「さ、お兄ちゃんの横ね。後の人のために、端から埋めるのよ」

——おっさんなら一番遠くに行かせるけど、イケメン君ならもち、真横よ。

息子を横の小便器に立たせる。

そしてズボンとパンツを下させる。年齢相応の小指のようなものと小ぶりの肉の塊があらわになる。

「さー、いいわよ」

言いつつ、息子のほうを見る形で、その先のイケメンを見る。

——ん……おおっ！ す、すごいタマタマ！ 何あれ！ り、リンゴみたい……すごい重いんだ、紐切れそうなくらいぶら下がって……おおおおお、凄い、これ三〇発ぐらいできるんじゃない？ 種馬だわ……うふふ、これは上絶対すごいわ。どれどれ……

並はずれた巨玉から、徐々に視線を上げていく。

すぐに、巨棒が見えるはずだ。

が、見えない。

見えない。

見えない。

視線を上げる。

見えない、いや、やっと思える。

小指のようなものが、根元からぴょこりと出ているのが。

「ちょ、ちいさっ！」

パン、と自分の口を叩く主婦。

真っ青で、イケメンの顔を見る。

何食わぬ白斗。

反対側を剥いて、唇を噛んでいた。

——な、なんだよこの女！ ちょっとは遠慮しろよ……

顔を真っ赤にする。

そう、白斗は短小である。ついでに、包茎である。

エーギル使いとしても格闘者としても超一流で、顔も体格もいい。ついでに睾丸まで巨大で精力絶倫。

しかし、にもかかわらずその男のシンボルだけは極小で、皮だけ豪華という悲惨な仕様。

玉がデカイので、海パンを着ても短小だとは気づかれない。巨玉に幻惑され、巨根としか認識されない。

しかし脱ぐと、仮面は剥がれざるを得ない。



顔を真っ赤にする主婦。

「いや、その……け、ケンちゃん小さいね」

「えー、ママ何言うの？」

不満げな子供。と、その目が横の「お兄ちゃん」に向く。

「うわっ！ お兄ちゃんキ○タマ大きい！ 大きいよママ！」

「あ、そうね！ お兄ちゃん、大きいねえー、大きいねえー」

何がととは言わないで、とにかく「痺れる懂れる」という感じで、白斗のモノが本当に巨大だった場合出したらどう声音を想像して出す。

「うわああ、なんて大きいの……すごいわねえ。お兄ちゃんのすごいわねえ」

——って、何言ってるの私……変態じゃん。ヤバい、顔赤くなってくる。実際におチンチ○がタマタマに見合う巨大さだったとしたら、逆にこんなこと言えないわ。っていうか、やばい！ なにあのチンチ○！ 小さすぎ！ みんな信じてくれないかも！ っていうか私も今見てるけど……信じらんねーもん！ 超絶短小！ 旦那のもクッソしょぼい短小だけど、これと比べたらデ○チンだし！

顔を赤らめつつ、意味不明の旦那への賞賛を脳内で行う主婦。

目を輝かせていた子供。と、玉を見たら、メインのほうも確かめたくなるのが当然である。

見上げて、笑う。

「わー！ ママ見て！ あの人のチンチ○！」

「見ちゃダメ！」

「見てよ！ ほら、チンチ○小さいよ！」

「見ちゃいけません！」

「僕のチンチ○より……」

「ああああああああああ！ だめっ！ それは言っちゃダメ！ 本当の事でも、言っちゃダメなことはあるのよおおおおお！」

「僕のより小さい！ 半分ぐらいじゃない？」

「すいませんすいませんすいませんすいません」



「いや、いいですよ。見間違いは誰にでも」

「お兄ちゃん、本当だよ。見間違いじゃないよ、ほら、ほら」

小便をしつつも、近づく。チャレンジャーというより何も考えていない子供。

自分の年齢相応のシンボルを示す。当然のように皮で防御されているのでビームは拡散される。

ただでさえ飛び散るのに歩けばさらにだ。ついでは言えばズボンを半端に下ろして歩いて歩きにくいのでさらに飛び散る。

白斗の足元にも尿が飛び散るのを見て、さらに真っ青になる主婦。

「やめなさいケンちゃん！」

「えー」

震えつつ、チラ、と子供のほうを見る白斗。突き出された一物。背丈が圧倒的に違うので、並べて見比べるというのも難しいが、普段自分のを見ている白斗にはスケールがわかる。

——ううう、ほんとに俺のよりデカイ……こんな小さい子なのに、チ○コだけ俺のよりデカイ……大差はないが、見ればわかる程度には……うううう。

母親のほうを見る。

ちらちらと見比べる。青ざめて引きつった顔だが、ちょっと頬の端が緩んでいた。

なんだこれ、と鼻で笑っている気がした。

しかし、何も言わない。むしろ、子供をなだめる。

「さ、ケンちゃん、戻りましょうねーねー」

「ほらほら、見てよママ、僕のほうが大きいよ。お兄ちゃんよりおチンチ○……」

「やめて、本当にやめて。ごめんなさい、この子……」

「いや、いいんですよ。見間違いは誰にでも……」

あくまでも見間違い説をゴリ押しするつもり of 白斗。

それに心外そうな少年。

「見間違いじゃないよ、ほらほら。タマタマはお兄ちゃんの勝ちだけど」

「勝ち負けとかやめて ケンちゃん！」

「チンチ○は僕の勝ち」

「やめて！ マジで！」

「いや、見間違いは誰にでもある……」

見間違い、として押し通すしか男としてのプライドを保つ道はない白斗。

と、そこに新たな入場者。

「あ、いたいた、男いたよ」

「アレ？ やだ、かわいい子もいるね」

「野球の？」

「ええ……って、あなたたちは？」

制服姿の少女が三人。

暇だから、立ちションしている男の一物でも見てやろうと入ってきた。

男女が逆なら逮捕だが、**女の子様がやるならセーフ**という不公平な案件。

それでも、一様ごまかしは口にする。

「あ、私ら、女子トイレと間違えちゃって」

「きゃはははは、間違うかよ！」

「まあ、戻るのも面倒なんで……」

「って、あの人！ スグゲー……」

ぎゅ、と白斗の巨大すぎる肉玉が引きあがる。

——ひいっ、こ、こいつら何言う気だ！？

その端正な顔を指さし、顔を赤らめる少女。

「スッゲーイケメン！」

「きゃああ！ やだ、かっこいい！」

「あ、そうね。そうよねえ、ほんとにかっこいい人。芸能人どころじゃないわ」

「ですよー！」

「ねえ、私今フリーなんで、どうでしょう？ 付き合ってください！」

「あ、コラ！ 私彼氏いるけど、寝取ってください！」

「おいおい！ マジかよ！ 私も彼氏二人いるんですけど、捨てますんで、どうでしょう？」

「お兄ちゃんモテモテだね！」

「本当ねえ、それじゃそろそろ……ああ、まだ出てるの……」

「ん……あは、結構大きいねえ、ボク」

子供相手でも、やっぱり女としてそこは気になってしまう少女。

言われ、ポツと顔を赤らめる子供だが、今さっき巨大な大人より自分のが大きいと確信したばかりである、胸を張り、股間を突き出す。

「お兄ちゃんより大きいよ」

白斗の息が詰まる。

少女は、子供の言った意味を勘違いする。

「きゃはは、兄弟で逆転か、大変だねえ」

子供の兄、この場にはいない本物の兄弟の話だと。

別の少女も同じように股間を見下ろし、頬を緩める。

「うんうん、大きいよ。これじゃお兄ちゃんが負けても仕方ないかー。でも男として、お兄ちゃん結構きついんじゃない？」

「まあ一歳や二歳なら、いくらでも逆転するわな」

「あは、ボク、いいこと教えてあげる」

しゃがむ少女。

「男の価値はね、チンチ○の大きさに決まるのよ。お兄ちゃんより、ボクのほうが男として上だよ」

「ちょっと！ 何ホントのこと言ってんのよ！」

「ぎゃははは！ っていうか歴代彼氏のランキングもチ○コランキングとイコールだしね！」

まさか「彼氏いるけど寝取ってくださいませんか」とまで言ったイケメンが極小の一物の持ち主だとは思ってもいない少女たち。気づいていないからこそ、本音である。

震えるしかない白斗。

——こ、この子ら本気で、本気でチ○コがすべてだって……そんな……

口説いている男を地獄に落とすにつつあることに気づいていない三人の少女は、年上の女性に目を向ける。子供がいるから既婚者で、毎日のようにしているだろう女性に。

「ね、お姉さん、そうでしょ？」

「男の価値とチンチ○のサイズはイコールですよー？」

「あは、なんか当たり前の話聞いちゃってすいません」

「いやあああ、全然、全然そんなことは、全然」

震え、目を周囲にちらちら向け、息子の小便が小さい体のわりに終わらないことに焦燥しつつ、必死で否定する主婦。

笑う少女たち。

「あははは、またまた」

「経験豊富なお姉さんのほうがわかってるでしょ？ デ○チン最強……というか、サイズでダイレクトに気持ちよさが変わるってこと」

「いやいやいやいやいやいやいや、そんなことない……そんなことないですよ？ ほら、指と口とか、テクニックで……」

血の気が引いていた白斗の顔に、少しでも赤みがさす。

——そ、そうだよ！ それ、俺もそれ言いたかった！ セックスの気持ちよさはテクニック！ チ○コのデカさじゃないって！ 言ってやって、お姉さん熟練者として言ってやって！

「え、技術ですか？」

「そうそう！ 技術！ チンチ○じゃなくて、技術！ 小さくてもいいの、小さくてもいいの、小さくてもいいの」

念仏のように「小さくてもいい」と連呼する主婦に引く少女たち。

一瞬黙る。

ついで、嘔き出す。

「またまたあ！ でっかいチンチ○してるからって指や口が代わりに小さいとか、動きが悪かったりしないでしょ？」

「短小も、この子みたいなデカチン君も、テクニックを磨く機会は平等。それじゃモノがデカイこの子が有利なのは当然でしょ？ ねえ」

顔を赤くする子供の頭を撫でる少女。

——うーん、かわいいわあ。おチンチ○も年相応で別にデカいってこともないけどかわいいし……こんな子供でもチ○コ褒められたらやっばうれしんだ。あは、男ってかわいいわ。で……

横。

まだ、白斗のそれを見ていない少女たち。

暇つぶしに立ちション見物にやってきた少女たちだ、そこへの関心は人一倍である。

——普通のおっさんのチ○ポとかならちらっと、「間違えて入っちゃった」感じで通り抜けつつ、個室に入る前に見るんだけど……この人すごい、超イケメンだから……足止めちゃった。足止めてマジマジ見るのも無理があるし……でも、もう我慢できない。見ちゃう。

慎重に、足から目を向ける。

目を剥く少女。

仲間を見る。

下がり、小声で相談する。顔は真っ赤だ。

——ひいい、見られた、短小……

散々「デカイほうがいい」とか「サイズですべて決まる」というようなことを言っていた少女らに自分の極小のを見られたと絶望する白斗。

動揺しすぎて、尿を止めてさっさと出ればいいとは考えられなかった。

一方、少女らは興奮状態である。

「ちょ、ちょ……すげえよあのタマタマ……」

「信じらんねえ」

「こ、このぐらい？」

睾丸のサイズを示しているとは思えない手つきの少女。手つきというか、手を握っている。指でリングを示したりはしない、握りこぶしを作って「拳ぐらい」と示していた。

「すごいわああ、タマタマ、マジで馬並み？ 馬の見たことねーけど、馬のがアレでも驚かないよ。むしろ「うわ、やっぱご立派なんだ」って思うよ。馬についてても大きいよアレ！ 重そう！ ずしーとぶら下がってて、紐切れそう！」

「いや、じゃあチンチ〇は……おチンチ〇様はどのぐらいご立派なの？」

「見たら気絶しちゃうかも……見るしかねえ。一生に一本のどデ〇チン様だ」

小声だが、聞こえてる。

主婦が唾をのむ。

——まずいわ、まずいわ、めちゃくちゃ期待してる。これで**まれにみる極小**だと知ったら、
どうなるの？ ただでさえデ〇チン至高の子たちなのよ？ っていうか……まあ私もそうだし、**女なら全員そうだと思うけど**。とにかくいやよ、喧嘩に巻き込まれたりするのは。

もう完全に惚れ込んだ顔の少女たちが再び子供と白斗の間に入り、下から視線を上げていく。

「うふふ、お兄さん、考えてくれましたか？」

「寝取りって気持ちいいと思いますよ？」

「私らのクソ男が文句言ってくるけど、お兄さんなら楽勝ですよ」

「ていうか、私らが片付けてもいいですよ。キンキン蹴っちゃえば男なんて」

「ナノメカで玉ぐらい治るから、遠慮もいらないしねー」

——あれ？ っていうか視線上げてもおチンチ〇見えな……え？

メスそのものだった顔を、急に強張らせる少女たち。

その目には、小指のような何かが写っていた。

短小責めと短小寝取りのお話、

まだ寝取りはまるつきり始まっていませんが、体験版終わり。

この後、主人公は本格的な短小言葉責めを食らい、

彼女をレ〇プで寝取られたり巨根にあっさり陥落されて本格的に寝取られ、

ついでに彼女に去勢されて目の前で寝取られセックスをかまされたりと

悲惨なことになっていきます、続きは製品版でお楽しみ下さい。